

明治三十一年十二月二十六日 禮拜三 第三種郵便物認可

明治三十四年二月十五日 號九十四第

每月(二回)一日、十五日(發行)

# 改教時報

## 社説

◎偉人逝く◎公德實行會◎病院の設備

## 論説

◎政治界に於ける佛教の感化勢力

## ◎監獄所見

## 社會

◎一種の社會的制裁◎禁酒法案◎無能なる教育家◎福澤翁逝矣◎帝國議會◎彙報

文學士 有馬祐政  
楠龍造

## 雜録

### ◎紐育通信

### ◎冷言熱語

## 信界

◎友に與へて不滅の信仰を論ずるの書(其二)

文學士 眞岡湛海

文學士 秦敏之  
中山久四郎

第百四十九號

### 大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

### 政教時報

## 偉人逝く

年改まりて明治の國家は茲に分別盛なる三十四年の新春を迎へぬ、獨立の經營をなすに於て些の欠くる所なきが如しと雖も、尙經驗あり蘊蓄ある父老の教に待つべきもの多し、而して我國は端なく二大偉人を失ふ、錦窠伊藤翁と雪池福澤翁とは、我明治の燦爛たる文明を誘導せし二大明星なり、今や二翁相繼いで鬼籍に登る、嗟哀しい哉邦人或は死したる高野長英渡邊華山杉田玄伯等の功を知りて、生ける伊藤圭介翁を忘れたるあり、而して翁は實に高野渡邊杉田等諸先生と同時に蘭學を脩めて、我邦に西歐文明輸入の魁たりき、唯翁や資性平和の生活を喜び、篤學といふ一點を除きては、少しも常人に異なるなく、其生活や平坦なる曠野の如く大道の如くして、奇岩怪石の突兀たるもなく、奔湍激流の壯觀もなく、二六時中書冊堆裏に汲々として、文字と植物との外には世間を知らざるなり、社會に出で、活劇を演せんともあらず、名譽利益を求めんともあらず、官爵位祿を欲するにもあらず、去ればとて招がずして來る所の名利爵祿を拒斥せんにもあらず、此故に位記來れば謹んで之を享け、學位來れば甘んじて之を迎ふ、而も翁の名聲は是等の人物とは相關する所なく、之れあるが爲に毫末も損益する所なきなり、翁が歐米の天地

### ○政教時報第四十八號目次

- 社説 娼妓の賦金を廢止すべし  
 論説 來るべき道徳と宗教(八木光貫)  
 ◎天下悉く小人也(安藤鐵腸)  
 社會 英皇女皇陛下の崩御等數件  
 信界 何ぞ心主を求めざる(興地觀圓)  
 令音 新山吹譚(文學士甲南生)

### 本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金叁拾錢	金六拾錢	無遞送料

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年二月十四日印刷

發行所編輯人

上村幸三郎

に向て其世界的名譽を博せしもの固より翁の功勞の眞價に酬ゆるものにして、區々たる人爵と相關せざるや明けし、此點に於ては福翁が世を警醒せんが爲に、故らに士族の籍を奉還して平民となり、獨立自尊を標榜して、あらゆる人爵を拒斥せしとは稍趣を異にせしものあり、福翁に至りては、余輩の縷々を用ひず、世自ら耳目あり、其常識の圓満に巨大に發達せる點に於て、其社會文明の過度期に際して、能く悼々として國民を教へて、新文明を吸收せしめたる功勞に於て、其慶應の初年より學校を設けて幾萬の後進を誘導せし點に於て、千載不世出の大偉人と稱するも敢て過賞にあらざるを信ず、然れども余輩が猶一層翁を景仰する所以は翁が終生陰徳を積むに怠らずして、其個人的感化力の廣大なるにあり、翁を知る者は皆言ふ翁の家庭は一の樂園なりと、何人と雖も其知人門下生等より、其思想に於て、其人物に於て多少の毀譽褒貶は免れざるものなれども、惟り翁の知人は皆翁を賞揚するを見るのみ、翁の門下生は翁を崇拜するのみ、近くは時事新報を見よ、其文章といひ、其思想といひ徹頭徹尾翁の面影ならざるなし、其所論は皆其經典たる福翁百話を時事に應用適用するのみ、思想の淵源は一步も一部の福翁百話の範圍外に逸せざるなり、惟り新紙のみならず、慶應義塾出身のものを見よ、必ず翁の面影を留めざるはなきを、翁の教育法は決して一模型に鑄入せんとの旨意にあらざらず、人として其自らを發達せしめんと努められしなり、而して斯くの如く翁に私淑するもののみにして、到る處に小福翁を見るは、翁の個人的感化

の偉大なるに歸せずんばあらざるなり、嗚呼余輩は翁の獨立自尊なる道德的主義、拜余宗なる處世法に於て、心に屑とせざるもの多々なりと雖も、所謂三田派の此思想は永く我社界に留るべく、而して翁が文明輸入の大功は千歳不磨なるべく我國民は深くこの大功に向て感謝すべきなり

### 公德實行會

近來公德問題に關する所論は頗る其聲を高め、所有新聞雜誌に於て之を論せざるなし、而して公德問題に關して其個條を擧げ來れば、我誌が掲げしのみにも已に半百の多きに及べり、猶此他屈指に暇あらざるべし、之を一時に悉く實行せしめん事は決して容易の業にあらざるべし、要は唯人々の根本的道德心を修養せん事を勸むるの外なかるべし、然れども此は何時の世何れの國を問はず、心ある人士の爲すを意らざる所にして今更事新しく論するまでも無き事なり、去れば現今故らに公德奨励の必要大なる時期に當ては、個條は多きを求めずして、唯一ヶ條二ヶ條位を限りて、此件は會員全體斯くの如く嚴守すべしとの、公德實踐會の起らん事を希望するなり、例せば前年反省會なるもの起りて當時會員は禁酒を實行せしが如き、又現今佛教清徒同志會會員が喫煙を禁止しつゝあるが如き是なり、依てこれより公德の一二ヶ條づゝ例へば約束の時間を嚴守する事とか、取引に對する違約を爲さざる事とか、公園路傍等の花枝を折らざる事とか、信書の回答を

等閑に付せざる事等何如なる小なる個條にても宜しければ、之を標榜して、會を組織し、個人としては他の萬事に付て注意すべきは勿論なれども、其會の條目だけは特に會員として之を確守するに至らば、其公德の上進に益する所尠少ならざるべし、余輩は斯る目的の諸會の興起を希望すると同時に、從來組織しある諸會に於て、在來の規約の外に公德に關する個條を一二ヶ條づゝ附加せられん事を希望に堪へざるなり、茲に余輩が全國の我佛教徒同盟會員に向て實行を希ひ度き一事あり、それは他にあらす葬式に對する敬禮是れなり、歐米人皆德行家にはあらざれども、彼等は路上に於て、葬式に遭遇する時は、必ず帽子を脱して立禮す、是頗る美事なり、假令習慣性の致す所にして内に敬虔の念なしとするも美事たるを失はざるなり、夫れ死は人世の最大事にして、最も人をして神聖ならしめ眞摯ならしむるもの、如何に見ず知らずの他人なりと雖も、人たるものは死に對しては同情を有すべきなり、去れば我が邦人もよろしく歐米人の美行に倣ひて、途上葬式に逢遭せば、我身に直接無關係なりとて、一禮を施して然るべしと思はる、是佛教を奉ずる者に取ては、衆生恩を報ずる一端といふべし、又同じく社會を形成する一員に對して盡す義務といふべきなり、此故に途上葬式に逢遭して敬禮を致さん事は、一般邦人に對して勸告すると共に、別けて我同盟會々員諸君は、此事を確守せられん事を希望するなり、未だ總務員會の議決を経たるにあらざれば嚴として規則にかふるに至らずと雖も、諸君は徳義を以て之を嚴行せられん事を希望し

て止まざるなり、

### 病院の設備

文部省は諸學校の設備を定めて已に厲行せり、然るにまだ内務省は病院の設備を規定せざるなり、而して應々病院には慘劇を演ずるあり、先年小石川區の加藤癲癩病院が焼失して、患者六人を焼殺せし如き、又過日大學第二醫院の火災に於ても亦十九名の焼死者を出せり、何ぞ夫悲惨の甚しきや、火災の如きは元と過失に出づるものにして、強ち之を詰責すべからずとするも、内務省にして若し病院の設備規則を厲行し居たりしならば、斯くまでの慘害には至らざりしなり、加藤病院の如き、第二醫院の如き、皆人家稠密の地に大なる二階建の建築物ありて、而も棟と棟とは接近せり、まして第二醫院の如きは二階を病室として之に昇降する梯は一個より無かりしといふ、設備の不完全も極れり、斯る次第なれば、斯る慘禍を招きしなり、何程か取締ありといふ私立病院にても、東京市中には人家稠密の間にありて一旦失火に遭遇する如き事あらば逃げ場を見出す能はざるべしと思はる、病院あるは、余輩が現在知る所なり、余輩は斯る事に關しては無關係無智識の素人なれば之を論ずる資格なしと雖も、唯一日も早く病院の設備を規定せられん事を望みて止まず、只此に素人考の一端を言はば、病院には十分なる地積を具へしむる事、成るべく人家稠密の地を避けて第二醫院の如く地境に溝渠を

置かしむべからず、病室は必ず平家建にして出入口を努めて多くすべき事、各専門科及診察所、調劑所等分ち得らるゝだけ建築物を分ちて一大建築物内に諸科を兼ねるを廢する事、消火器の備付を十分にす等事は是非に設備中に加へられ度條項なり、余輩は唯火災に對する豫防法のみにて、思付きし儘を記して、世の注意を促す事爾り、

論 説

### 政治界における佛教の

### 感化勢力

文學士 有馬 祐 政

苟くも宗教の感化が深く確く人心の内奥に及びて、信念此に樹立して、その主宰となり、寂然として働かず、熾乎として光りを放つに至りなば、その勢力の達する處殆んど將に際涯を見ること能はざらんぞとす、宜なるかな、古來これによりて偉業を奏し、これによつて大事を成したるの例、東西に稀なりとなさず、教派の開祖はいふを須たす、歴世の宗教者は數ふるに遑なく、その他政治家といへる者において、信念の安立と活動によつて、能く萬難を排して功を樹て、能く一命を擲ちて仁を成したるの類、亦實に渺しとせざるなり。况んやその忠節といひ、義氣といひ、公德といへるものにおい

ては、その感化一般に顯著なりしを認めずんばならず、これ何ぞ獨り政治家においてのみといはん、あらゆる社會は概してみなかくの如くなりしなり。現にかの基督教國を見よ、特に英米諸國の國民の如きは、公其心最も熾盛にして、就中政治家が道義の念非常に敦厚なるは余輩をしてうたた欽羨の情に堪へざらしむるものあり。

惟ふに、わが國にありても、佛教の宣布ありしがために、その感化遠く微細の點にまで到り、その勢力博く高上の邊にまで擴がり、上は推古天皇の御代、即ち聖德太子の御攝政時代より、下は徳川將軍の幕府時代の末葉に至るまで、忠孝節義は勿論、公德も全體に行はれて、社會の秩序、人意の標準は、多くは佛教によつて維持せられたりき。固より儒教のありあり、これに與つて多少の力ありしことは、否定すべからずといへども、この教は畢竟世間的範圍を脱する能はず、しかも規制的性質、形式的傾向を帯びたるものにして、未だ佛教の如く、到底人心の秘奥に透徹すること能はざるものなり。その力ありたりといふは、唯僅に形相の上においてのとなり。發作の源泉ともいふべきものに至つては、必ずや一に専ら佛教の感化になりたるものと斷定せざるを能はず。人或は日本の儒教特に徳川氏時代の陽明學派の如きを以て、然らずとなす者あらんも、その宗教的感化ある所以のものは、全く佛教より得來りたるものにして、その他の儒教に在りても、亦たかの神道といへるものにていて、かゝる能力を有するものあるは、一として佛教に學び、佛教に假りたるものと謂ふべき

ものにあらざるはなし、之を要するに、佛教はわが國民の心意上の中心となり、精神界道德界の主宰となり、その感化勢力は、一千二百餘年間全社會の何れの方面にも普及しぬたるものにして、その政治界の如きにおいても、亦正に然りしを肯定するに足れり。

然るに方今わが國の政治界は果して如何なる光景を呈しをるか、その真相は實に如何なる者ぞ。憂慮に堪へざるもの此處彼處に現生し、腥風醜態ますます劇しくなり、紛亂行いよ／＼猛んになりゆき、其底止するところを知らず、志ある者をして痛嘆措く能はざらしむ。今その最も著はれたる二大政治家について、その一斑を示さんと欲す。

二大政治家とは誰ぞ、いふまでもなく、一人は即ち伊藤博文にして、他の一人は即ち星亨となす。この二人は當世に於る政治界の兩豪傑ともいふべき者にして、共に身分の卑下なるどころより出で、夙に官海に入り、巧言令色、游泳翺翔、展轉しては遂に政治界の大立物となり、その手腕、その辯説その見識、その度量、その膽略、素より群小に超絶して、優に一世を睨視するに足るべし。蓋しその豪傑たり政治家たるについて、實質略備はれりといふべき者歟。現に彼等は同政社の中にありて、一は朝に總理大臣たり、而して他は野に院內總理總務委員となりをれり。表面互に提携するといへども、裏面元より相頡頑するところあるべし。これ却つて兩相併立するをうべき所以にして、誠に權衡を得たる位置に在るものなり。その他朝の方に山縣侯あり、野の側に大隈

伯わりといへども、この兩者は權衡を得たる者はならず、しかも、その實質においては、悉く數歩をこの兩者に譲らざるを得ざるものあり、要するにこの伊藤と星とは目下政治界に對立せる豪傑なりといふも、豈敢て謬論なりとせんや。

然れども、つら／＼彼等の品性と素行とを檢察するに、大いに恨みなき能はず。伊藤は柔弱にして淫奔、星は貪婪にして暴戾、既に萬目の齊しく諷知するところの如し。共にこれ常人すら耻とするの品行、その敗徳壞倫の人たるにおいて、固より論なきなり。しかのみならず、彼等はこれらの私欲邪行を逞しうすることに汲々として、或は小人の收攬につとめ、或は斗屑の利得にわせり、甚しきは圖國のために國務を碍げ、紛争のために布政を紊亂し、外交問題の最も多大なる海外事業の最も切要なる今日において、徒らに區々たる競争を試み、鄙野なる計畫策を事とす。概くに堪ふべけんや。

凡う政治家たる者においては、徳操を以て最も重しとなす英國にはゆる「ゼントルマン」「ステーツマン」てふ語中には、いかに多く徳操あり節義ある、人たるの意味を含みをれることよ。蓋し政治家は本大權に參與し國政を料理する者にして、社會の上層に立ち、國民の模範に任すべき者にわらずや。況んや、わが國の如きにはありては、親しく陛下の御猷謀を輔翼し御鴻業を贊襄すべき者なるにおいてをや。又況んや、玄徳を以て世界の上に立ち、大義を以て列國の間に居らんとするわが帝國の政治界にある者においてをや。その品性を矯正しその行業を戒飭すべきこと當然なり。

然り而して、内治と外交とは、洵に國政の二大方面にして一日もこれを偏廢すべからざるものとす。その偏廢の國家に大害あるは、火を賭るよりも明白の事に屬す。かの獨國の如きは、一方においては、教育をはじめわらゆる實業を奨励して切りに内治の圓滿を計り、他の一方においては、戦法術策をはじめ兵器軍艦を増加して盛んに外交の優勝を務めとせり。露國の如き、亦その期圖の強烈遠大なる者あり。諸大列國皆夫れ然り。特にわが國の如き新進國にありては、内國の經營に努めて、國家の基礎を鞏固にすべき上に、最も力を盡くして外交問題を講じ、大いに皇運振張の計を樹つるを要す。危機總兆は豫じめ知ることを得ず、否、何れの時にも潜在するものなり。されば常に大計を運らして餘裕を存し置かざるべからざるは勿論とす。

かく論じれば、則ち伊藤と星の如き、徳操に闕如たり、外交に盲目なる者は、たとひ、才幹群を抜き、氣量衆を凌ぐありといへども、到底資格不具の政治家たるを免るべからず否、或點よりいへば、或は豪傑といはしうべきと云へども、全く政治家たる者にわらずといふを妥當なりとす。然るに彼等が堂堂として大權に參與し國政を料理するを見る。嗚呼悲しむべきの最も甚しきものにわらずや。

但し伊藤氏は、貪婪といふにわらず、暴戾といふにわらず、柔弱なるのみ、淫奔なるのみ。むしろ稚氣憐れむべしとするも、かの星なる者に至つては、貪婪飽くことを知らず、暴戾極まるどころを知らず、小より小に入り、邪より邪に入る。

殆んど救済するに由なきもの、如し。而して、彼は揚揚とし

て天下の大政治家を以て傲然蟠踞し、剩さへ東京市長東京市

教育會長などとなりをれり。眞に言語道斷なり。

嗚呼彼等は畢竟精神の修養なきものなり、全然宗教の感化

なき者なり。豈何事をなすべき。徒腥風醜態をしてまそく

劇しくならしめ、紛臭亂行をしていよく猛んらしむるの

み、うの結果實に寒心すべきものあるを豫想す。嗚呼世に

はゆる二大政治家にして猶且然り、況んやその他をや。政治

界の腐敗濁亂、略以て知りうべきにあらずや、それかくの如

くなれば、佛敎の感化をして認むべき、仁情といひ、義節と

いひ、公德といひ、正行といへるものは、殆んどわが政治界

には存しをらざるにあらずや。換言すれば、方今の政治界に

おける佛敎の感化勢力は絶無なるにあらずや。そもくこ

れ維新以後、科學的智識、物質的文明の傳播等ありて、主に

時勢の然らしめたるものありといへども、亦大いに佛敎家の

懶惰に歸せざるべからず。

余は政治界の近況について、國家の前途を慮るに、悲痛の

感なき能はず、即ち、所感の一端を記して以て私に佛敎恢

興の機運來り熟せんことを懸望す。

監獄所見

楠 龍 造

國を家と思ひ國民を同胞姉妹と思はば、家内に監獄あり同胞

姉妹の中に囚人あることは、家族の人誰が一人として之がた

の下に支配せられたる人にとりては、赤衣をき粗飯を食する

ことは、大に苦痛なり、然かのみならず我と我心に耻する所あ

り、大に慚愧悔悟するに至らん、されど從來食ふや食はずに

生活し、良心も慚愧も知らざる人にとりては、衣食の心配も

なく、雨露に犯さるゝ憂なく、入浴あり運動あり、窮屈な

がら一定の仕事をなせば夫にて事足り、教誨の如きは形貌は

殊勝を装へども、心中には馬耳東風に聞き流し、百も承知二

百も合點と云ふ如き人に取ては、監獄も監獄たるの用をな

さるにあらざるや、吾人は罪人は種々の不幸より此處に至

りしものなれば、惡むべきよりは寧ろ憫むべきものなりと

思ふ、されど之を憫む所以の道は、慚愧悔悟せしむるを以て

尤も上乘となす、されば監獄にあつては慚愧悔悟せしむべき

良方法を取らざるべからざるなり、此處に於てか吾人は少し

く一考したき者あり、假令形迹上の罪は同一なりと雖、其人

の地位財産等の身分と、日頃の精神操行の如何換言すれば良

心の鋭鈍如何により、之が所罰上に輕重をなすは至當なら

ずや、何となれば日頃衣食に不自由なき人にとりては、監獄

めに悲しみ之がために苦まざるものやある、これは父兄の責任

なりとして、自己は一向無關係なりと云ふと出來べきや、一家

に監獄あるは一家の不幸なり、同胞姉妹に囚人あるは家族全

体の耻辱なり、何と加して一日も早く一家より監獄をとり除

け、惡しき同胞姉妹をして改善せしめんことは、家族全体の

常に焦心苦慮する所なるべし、然るに我國民は監獄のことは、

司獄官や教誨師のみに一任し、あまり注意する傾向なきは、

國家に對し國民に對し同情のなき仕打ならずや、唯に國家國

民に對して同情なしと云ふのみにあらず、自己の利益と名譽

をも顧みざる仕方なり、監獄及び囚人は幾多の國税を消費し、

而して消費するの多き程、國辱を高めつゝありとせば、豈に

余所事に思ふべきものならんや、須く國民は此問題につきて

は常に注意せざるべからざるものなり、

予頃日友人より左の一語を聞き大に感ずる所あり一日人あり

他家の荷車を竊取し平然として途中をガラ／＼と引去れり、

家人之を見て大に怒り、忽ち執へて警官に付せり、警官之を

尋問するに、其人答へて曰く、予は貧窮にして衣食する能は

ず、監獄の御厄介になりたきため、之を竊取せるなりと、嗚

呼諸君は此盜人の言を聞き如何感ぜらるゝや、吾人は此言語

の中に深き意味のこもれるを知る、一は社會に立て衣食を得

るの困難なること、一は下等の人民にとりては監獄は安樂す

ざるこれなり、往々人の云ふ所なれども、今日の監獄は

中以上の人には極めて苦痛を興ふれども、下等の人民には安

樂に過ぎたるにはあらざる乎、從來可なり生活となし良心

上の罪は同一なりと雖、以上の點を參照し、形罰に區別を設

けることは必要なることにはあらざるか、固より其精密の區

別は出來ざるも、大判の區別にても出來たるならば、區別の

なきよりまさると必然なり、假に之を上級下級と分てば、上

級には良心上苦を主とせざるべからず、下級には嚴なる規律

的勞動の苦を主とせざるべからざるなり、彼の放恣なる下等

の人民の尤も苦む所のものは、規律的勞動なり、その惡を犯

すに至る原因も、規律的勞動を欠くに依るもの尤も多きこと

なれば、其所罰として嚴なる規律的勞動を課するは、固より

其宜きを得たるものとせざるべからざるなり、聊か所感を記

して監獄關係者に問ふ、

天地不爲二物一枉其時止

日月不爲二物一晦其明也

社 會

一種の社會的制裁

我國の如き社會制裁の薄弱なる國はあらざるべし、社會制

裁力の薄弱は總て其國の道義心高低如何を卜知すべしとせ

ば、豈悲むべきは我國の道義心の頽廢にあらずや、如何なる

罪惡を犯しても一たび富豪者となれば、人は其膝下に拜跪す

人漫然之看過するのみならず、却て迎合阿諛するが如きは沙汰限りといはざるべからず、推して以て道義の衰廢、社會的の制裁の薄弱を知るべき也、頃日新聞紙上一種の社會的制裁事實を發見せり、即ち某區受持の巡查某あり、其附近に宏壯なる家屋ありて主人は常に贅澤なる生活をなすをみて、不思議に思ひ身元を探りしにボン引の大親分なることを確めたり、去れば件の巡查は是非共この怪物を征伐せんとて、戸籍調を名としてその家に至り「汝はボン引と云ふ盜賊類の者也、早く正業に就かざれば其分には差置かず」と聲高に怒鳴り立つれば、近所の者も始めて新聞紙にて見る田舎者を欺くボン引とは彼の金満家らしき男かと爪弾きするに至り、後には止むを得ず其處を拂ひ去れりと云ふ、如何なる悪人と雖も社會的制裁には抵抗するの力なく遂に降伏せざるべからず、然れども社會的制裁は或下層の一局部に於て行はれ易きも、あらゆる罪惡の伏在する上層社會には甚だ行はれ難し、これ吾人の大に遺憾とする所なり、

### 禁酒法案

爰に我帝國議會は喫煙禁止令を通過し、今將に未成年者の爲に禁酒法案を出でんとす、法案の性質可ならざるにあらず、未成年者の飲酒の害多きこと吾人之を知らざるにあらず、然れども如斯事は宜しく教育家、若しくは一家の主夫たるべきものゝなすべき職務にして、國家の行ふべきことならむや、

譽ならむや、嗚呼おはれなる哉無能なる教育家

### 福澤諭吉翁逝去矣

老理學博士伊藤翁逝去して未だ旬日ならざるに、明治の巨人福澤翁も續て逝去するに至る、年齢の差よりいへば福澤翁の伊藤翁に及ばざること遠しと雖も、所謂老少不定、命數のみは人事の如何ともすること能はざるなり、翁が維新の際に於て泰西の文物を輸入し我邦の文化に扶植したる功勞は普く世人の知悉する所、而して私塾を起し幾千の子弟を教養し、所謂三田流の人物をつくりしとは亦社會一般の知悉する所なり、吾人は翁が主張と主義とは多くの反對を有するものなれども翁が一生涯、始終一貫、堅忍不拔、顯榮利達の志を抱かず、よく社會改善に全力を傾注し、一布衣を以て一世を震蕩したるに至ては、吾人の敬慕して措かざる所以也、更に吾人の翁に敬慕すべきものは、翁の識見一代に卓絶したるにあり、翁が維新前後に於ける泰西の文明を輸入したる如き、社會風俗の改善に意を注きたる如き、女子教育改良の意見の如き、若くは晩年獨立自尊を唱道したる如き、先づ人の言はんとする所を喝破し、確に今世に獨歩したるものにして翁が識見の寔に非凡にあらざるを知るべし、時勢を知るはこれ俊傑が、翁の如きは眞に明治の偉人たるに耻ぢざるものといふべし、今や廿世紀の劈頭に於て此の偉人を亡ふ、痛恨曷ぞ地なし

法は常に實行と供はざれば百千の法律ありと雖徒に空文に屬し管に効を收むること能はざるのみならず、國家の威信を損する點に注意せざるべからず、喫煙禁止令發布以後果して幾干の効を奏せしや、豈疑を存せざるを得んや、若し國家がかゝる微細なる點に迄法律を以て干渉せざるべからずとせば、人の暴飲過食をも取締の要あるべし、何となれば之が爲めに胃を損し健康を害し、國民の虛弱を招く基となるべければなり、詮し來れば、國民の進退坐作悉く法律を以て干渉せざるべからざる奇怪の現象を見るに至らむ吾人は禁酒法案其者の不同意を唱ふるにあらず、要は國家自ら其本分を忘却せざらんことを望む

### 無能なる教育家

迷信と嘲り、厭世と罵り、宗教を全く無用視し極力之を排斥したる、おはれなる教育家よ、そが子弟は今如何の、狀態をかす、蠶屋淫行日に盛に益々墮落の深淵に沈まんとするにあらずや、國家は卿等の職務に忠實なるを知らざるにあらず、然れども國家は善に法律を以て禁煙令を公布せり、而して亦將に禁酒法議會に提出せられんとす、これ豈教育家の面目ならむや、悉く罪を教育家のみに嫁するは稍と酷ならずとせず、然れども喫煙の弊を誡め、飲酒の害を諭し諄々として之を導き、惡風に感染せしめざることを勉むるは、教育家當然の任務ならずや、而るに精神主義を重する教育上に法律の力を藉りて外部より之が制裁を加へんとす、これ豈教育家の名

### 帝國議會

今期議會のめざましきものは、増税問題なるべしとは、人も吾も思ひ居りしに、何ぞ圖らば反對黨の進歩派は旗幟を翻へして味方議員となりぬ、只申譯的に外交に關する質問書を提出せり左に掲ぐ

- 提出者 大石 正己  
賛成者 大養 毅
- 一、北清の擾亂は昨年来軍事上貿易上我國に無限の損害を蒙らし又外交上不測の危険を感ぜしむ而して軍隊は戰國の境遇を脱するに能はず故に同胞國民は憂慮措かず事局の眞想を知らんと欲するの情極めて切なり去れば帝國議會の開かるや速に該事變の顛末を報告するに立憲國大臣として議會に對する當然の職責にあらざる乎
  - 二、今回増税を必要とする理由の大主眼は清國事變問題に關れり去れば増税案を提出するに當ては先づ所謂北清事變の顛末を報告し且つ之に對する當局者の處置即ち我軍隊の行動外交上の成績を説明するは當然の手續に非ざる乎
  - 三、北清事變の善後處分に關し當局者は今日に至る迄列國と協同し若しくは單獨に滿州領土を保全して秩序を保持せんが爲め即ち我國の利益權利を保護せんが爲に外交に依り又は其他の行動を爲すの必要を認めざりし乎
  - 四、牛莊營口方面に於ける日清貿易の利害は最も大なり先きに騷擾起るに際し其境遇に應ずべき適當の方法を行ひて牛莊方面の平和秩序に變化を來たさしめざるは我國の爲め最も緊要なり認めざりし乎
  - 五、我北清派遣軍隊が他列國の軍隊に比し優勢なる地位に在るに當り若しくは連名公書を作るに際して我當局者は何故に滿州の事局を平穩に結ぶべき提案を爲さざりし乎
  - 六、過般來滿州の不穩なる形勢に對しては政府に於て當然英獨協商を適用すべき場合なり認めたるや奈何右及質問候也

### 彙報

◎醫科大學附屬第二醫院は二月廿九日未明火を失して、十九

名の焼死者と數多の負傷者を出せり、病軀の速に健康に復せんことを祈りし彼等は却て死を見るの不幸に至りしこそ、返すくもあはれなる事なり、●東亞佛教會にては去る十日錦輝館に於て、盛大なる發會式を擧げたり、●宗教法案今期議會には提出せざる事にさししが項日道路の風説をきくに當局者は咄嗟の間に議會に提出し之か通過を計るべしと、若し果して然らば當局者は國民に不親切の誹りは免れざるべし●二大學、三高等學校の追加豫算議會に提出せられぬ、吾人は速に之か通過を望む●全國寺院の住職は五萬餘人、佛教管長教師生徒は二十三萬人●大谷派本願寺にては女學校を設置し、來る四月より開校の筈なり●今回高田派本山にては斷乎たる改革を行ひ、大に寺務の刷新を計る由

問春何處來  
月墮花不言

春來在何許  
幽禽自相語

雜 錄

紐育 通信

在紐育 麻 鄉 學 人

●宗教信者 商工業の進歩驚くべきに比して宗教の勢力甚だ振はざるやに見受けらる、日曜日に教會堂に入れば、參詣者の數少なくして空席甚だ多し、參詣者の種類は老人と妙齡の

婦人なり、年少の男子會堂に入ること甚だ少なし、教師は常に慨歎しく曰く、紐育市の青年にして會堂に入るもの僅かに百分の五なりと

●日曜日 各商店戸を閉ちて業を休む、而も此間公然商業を爲すものは猶太人なり、又飲食店も其半は業を休まず、年少の男女は安息日を守らず、公園に車馬を驅り、自轉車を馳す、某教師歎じて曰く、近來婦人の安息日を守らざるや甚だし、教會は如何にして維持せらるべきと

●宗教の基礎 宗教は漸次信者を減少しつつありと雖、尙其基礎は鞏固なり、各小學校の教師は概ね女子にして宗教信者なり、學人一日某公立小學校を參觀す、最初の第一時間に於て、教師は生徒に祈禱を教へ、贊美歌と愛國歌と並べ教ゆるを見たり、而して又日曜學校に於ては、來會者の年齢に應じて級を分ち、一方に聖書贊美歌を教へ一方に社交の道を基督敎の主義によりて教ゆ宗教の基礎はかくして少年の頭腦に樹立せらる

●青年會 基督教青年會の期する所は、表面宗教によらずして、字派の異同を問はず、あらゆる青年を合同し、自然に宗教を注入せんとするものなり、當市に於ては壯大なる青年會館三個あり、何れも教育部、體操部、宗教部の三部に分たれ互に連絡あり、教育部に於ては重に實地の商工業科及び音樂語學を教へ、體操部に於ては運動場を設けて各種の機械を備へつけ、且毎夜教師が運動法を教ゆ、風呂場造りも此中に裝置せらるゝなり宗教部にありては、連夜各種の聖書研究科を設け

て、來會者の嗜好によりて何れの科をも撰び得ると、日曜日には有名なる商人等の信仰者を聘して其宗教に於ける演説を乞ふと、せり、殊に青年の男子を導くに尤も力を盡せり此青年會は昨年度は支那布敎の補助として寄附金を募り、今年日本布敎の補助費として寄附金を募りつゝあり、又此青年會は會員の爲に職業を求め、或は下宿の世話をもなすなり

●音樂 音樂唱歌は獨り社交の要具なるのみならず、宗教上の儀式にも亦非常の必要物となれり、日曜の集會には各教會何れも堪能なる音樂師と唱歌者を雇ひ置きて、説敎の前後には必ず贊美歌を獨吟せしむるを常とせり、參詣者も亦一つは此唱歌音樂の爲に會堂に牽かるゝことあり

●接待 來客を接待するの法を一見するときは、さすがに文明國民の品位を示し得て餘りあり、即ち來客あれば、之を客室に案内し家内相集りて先づ種々の談話を以て客を喜ばしめ暫くして音樂を奏して客を饗し、客若し音樂に堪能なるものならば其演奏を乞ひ、場合によりては舞踏を爲し終始飲食を用ゐずして、一座興味薄くが如し、之を日本の社交に於て、客來れば主人は客と共に飲食に忙はしく、主婦は厨房にありて調理に忙はしく、主婦と客と殆んど談話するの暇なく、客も主人も過飲過食の爲に翌日の業務に影響を及ぼし、經濟上の整理は爲に其均衡を失して、月末に夫婦間の争端を開くの状態に比すれば其差果して如何勿論合衆國に於ても、壯大なる宴會となれば、其贅澤非常なれども、かゝる宴會を催はすと、非常の金満家にして、且其度數も甚だ少なし、通常の人民

が偶々友人を晚餐に招くことあるも特に盛膳を供ふるが如きこと甚だ稀にして、平常の食事を以て之を饗し、只家内の客に對して少しも隔意なきを示し、以て客を満足せしむるを以て第一の勉めと爲すのみ、思ふに貧弱なる日本國民が、現今に於ける相互接待の状態は甚だ贅澤なり、僅少の收入あるものが毎月會費を投じて三四回の宴席に列し、客來れば忽ち身分不相當なる杯盤を供へて之を饗す、好意は喜ぶべしと雖、飲食に非れば人を遇するの道なしと思へる、未だ野蠻の域を脱したるものに非ず加ふるに現今日本の弱點は、經濟上の基礎鞏固ならざるにあり有識の士は世界文明國に於ける商工業の進歩と日本商工業の進歩の状態を比較し、ひろかに經濟上の日本の滅亡を疑ふものさへあるに至れり、然らば我國に於ける實際上の陋習を一洗して險約、高雅の良風を導かしむるは、獨り社交上の必要のみならず、又國家經濟上の必要なり宗教家たるもの先づ自から甚陋習を改めて、以て社會に率先するの覺悟なかるべからず

●飲酒 禁酒論者の多き丈に、飲酒者の多きには驚きたり、殊に立派なる貴女の風采を具へたる婦人が、料理屋に於て公然酒盃を手にするものあるは實に驚き入りたることなり、之等は定めて盛んに男女同權を唱ふる連中なるべし、さり乍ら苟も紳士どもいはるべき風采を具ふる男子にして、途上泥酔の色を呈せるものなきのみならず、酔に乘して他人に無禮の言動を爲すが如きもの絶てなきはさすがなり

●群集 人集りて立錫の地なきに至れば、忽ち互に推し合ひ

て人波を打たせるは日本人の特色なり當國に於ては如何に群集するも、決して他を推し無禮を爲すが如きことなし、互に相譲りて動く實に大人らしき所ある國民なり

冷言熱語

文學士 桂 園 生

◎本邦人の鼻 本邦人の五管は頗るよく其れ相應に發達して居る。八音十二律微妙幽韻の音楽も頗るよく聴き別ける耳も持つてをるし、五色千彩濃淡諸種の色彩の數も頗る多く、またよく是等の色彩に對する眼識も頗るよく發達して居し、上戸の酒下戸の菓子より酸苦甘辛鹹の五味、并に此五味を巧に加減鹽梅して料理せる飲食物の種類の多いとは實に驚く許り、しかも是等千種萬様の山海の諸珍味をよく味ひ別ける舌をもつて居るし、また皮膚の觸覺も頗るよく發達して居る事はいふまでもない。然るに、こゝに一つ他の諸官に比較して見ると其割合に發達して居らぬもの、少くとも其使用練習の發達して居らぬものがあるやう思はれる、それは嗅覺即ち物の香を嗅ぎ別ける鼻官である。是は今始つたといふ事にあらずして昔からの事である様に思はれる。天下太平の頗るよく續いた徳川時代に在りても、耳を樂しませる音楽や、眼を喜ばせる彩色や、舌に快き山海千萬種の飲食料理等は中々よく發達したが、鼻に訴へて嗅覺を喜ばしむるといふ様なものには彼の贅澤上品極れる香をさくといふ事や、また香袋位のものであつて、いづれも其流行使用の區域は實に狭きものであ

つた。明治の今日百般の事物進歩發達の世の中、音楽美術飲食等の奇なるもの珍なるもの、發達増加した事はいふまでもなく、同じく一旦衰えかゝり又は中絶して居つた徳川時代の嗜好の中にも、右に擧げたる種類の事は、すでに復興し又は今復興しつゝある者も中々あるが、香をさく事の如きは餘り流行せぬ様である、また西洋舶來の贅澤品等も中々盛に流行する様であるが、鼻を喜ばしむる香水類は贅澤品に比較して見ると、其割合に流行しない様である。是等の事實はともに本邦人の鼻の發達して居らぬ少くとも其使用練習の發達して居らぬ一二の例である。西洋人は他の諸官の發達并に諸官に關する嗜好は姑く別問題として、鼻官の練習嗜好は本邦人に比較しては多い様である、例へば、花卉の如きは東西人ともに一致して愛好賞美する所のものであるが、さて其花の色と香即ち眼を樂しませる色と鼻を喜ばせる香といづれを尤もよく愛するかとといふ點に付ては東西相異の點がある、まづ本邦人の重んずる所は花の香よりもむしろ其色または其形則ち枝振り木振り等にありて、菊や牽牛花等の所謂異り種なるもの幾百千種あるも、其異なる點は色または形にあり、また生花造花等の流行を見ても、本邦の嗜好は色と形即ち眼に關するものであるが、西洋人は花の色よりもむしろ其香を重んじ、香さへよければ花のいけ様の如きは我流だらうがぶつ込み挿しであらうが何んにも構はぬ方であり、また一寸西洋人の子供等に花をやつても、見て樂しむといふ事はこの次で、まづ早速鼻につけて其香を賞美する、其外西洋には香

水の種類は實に多い。是等の事實はともに鼻の練習嗜好の一癖は本邦人よりも西洋人の方が多し様である事の一二の例である。

かくいへばとて吾人は無暗に香水等の流行を希望するものではないが、鼻の練習使用の不足の結果或は其官能をも鈍くして惡臭にあふても何とも感せず、閉ぢ籠つて室がくさからうが、下水か汚くて惡臭鼻を衝いて來やうが少しも何とも思はぬ様な衛生上の大害を招くやうになりはしまいかと思ふの餘り一般の嗜好並に衛生の上よりしてもう少し否な大に鼻の練習使用を多くしたい事を望むものである。

◎五十代の人と卅代頃の人 聞くも忌々敷事なるが、或書肆の教科書運動掛ともいふべき番頭、妄言を吐いて曰く、府縣の檢定委員の中にも、概していふと、五十代以上の人は度し難く、三十代頃の人には賄賂がきいて運動の効果著しと。五十代以上の人は即ち藩政時代に生れ主として其時代の感化を受けたるもの、三十代頃の人には即ち明治に生れて所謂新教育を受けたるものなり。番頭の言葉にして真ならば、今日の宗教家並に教育家等は大一考すべき事であらうと思ふ。吾人は切に番頭の言の妄語ならんことを望むものである。

◎葬儀會葬者は誰の爲に會葬するか 北垣國道男爵かつて京都の知事として全盛の頃、老母永眠の不幸にあつたが、其葬儀は實に盛なものであつて會葬者の數は一萬人と注した、其時或る人北垣氏に語つていふには、君の存命全盛中の母堂なればこそ一萬人の會葬者もあり、失敬無遠慮の話であるが、若

も萬一此後不幸にして君の妻君が子供を失ふやうな事があつても、君の存命中ならば矢張り一萬人位の會葬はあつたらうが、君自身の死ぬ時には逆も今日會葬の十の一もあるまいと、或る人の言は即ち當今の會葬者は死者の靈の爲に會葬する者少くして、十中の八九は死者の遺族即生人の勢力の爲に會葬するものである事を罵倒した言である。當今人情輕薄にして或る人のいふがとく傾向はますます甚しいやうだ。北垣氏が或る人の言をきいて成程なと感慨に沈んだのは尤の事である。

◎善と惡 世の中に善行をなすが爲に惡の力をかゝるやうな事は無いが、惡事をなすが爲に善の假面をかぶり、善の假装をかきて善の力をかゝる例は實に多い。是れ即ち人性と善との關係を知るべき一例證であらうと思ふ。

◎名利色と功當女 實功なき虚名、不義の暴利、放蕩の御色、この三者の有害にして惡むべきものなると今更にいふまでもない。然し、名を賤んで功までを厭ふもの、利を斥けて富までを厭ふもの、色を遠けて女人一般をも厭ふ者の如きは、ともに是れ極端に走れるものであつて、山林獨善を以て自ら甘んずるものならばいざ知らず苟くも此活動世界に雄飛して功を立て、富を積み、人道を全くして社會の進歩を圖らんとするものの執るべき主義ではなからうと思ふ。要はたゞ名の爲に累はされず、利の爲に惑はされず、而して未だ色に溺れざるに於てあるのである。

◎古今對照 切取強盜は古浪人の套語、政權爭奪は今政客



の題目。  
◎冷熱……冷笑、熱罵、此二語のときは冷熱の二字を最もよく活用したるものとすべし。

信 界

友に與へて不滅の信仰を論ずるの書 (其二)

文學士 眞岡 湛海

吾生也有涯、而知也無涯とは莊子内篇の養生主に説くところ、何ぞ其言のヒボクラテスが人生の短さを嘆ずるの語と甚相似たるや、希臘醫學の鼻祖として仰がれたるヒボクラテスより傳へて羅馬の俚諺となりたる Aus honoris vita fraus の一語はゲーテ又之をフアウストに引き來りて我等をして、感慨に堪へざらしむ、嗚呼此の如きの感懐は獨りヒボクラテスのみならず、哲學者も、科學者も、詩人も、有限の生命を以て無限の智を探るの時、相共に發すべき嘆聲にあらずや、  
我の學術を學び文藝に志すや、究めざれば則迂愚遲鈍の謗りあり、然れども究めて得る所果して幾何ぞや、知て用ゆる所果して幾時ぞや、我の人に先つと三十歩ならば、人の我に先つこと又此の如きものあらん、我の智も未だ俄かに誇るべからず、人の愚も未だ俄かに笑ふべからず、汝の哲學は何の悟る所かある、汝の經驗は何の教うる所がある、一汝の哲學を以て悟りしよりも尙世に不思議の事あり」との沙翁の一語は此に

汝の哲學を罵倒せるに非ずや、「予は何物をも知らずと云ふとを知る」といへるソクラテスの一語は汝の經驗の狭少なるを汝の知識の淺薄なるを笑へるに非ずや、  
予は平生好んで哲學の書を讀み、又學術と經驗の重んずべきことを知り、而して予は益々哲學を研究せんとするの念愈々切なるのみならず、其他の一切の學術をも併せて知得せんと欲するの心暫くも止む時なし、然れども予は年毎に佛陀を信するの念漸く深きを加ふるが如くにおぼゆるなり、予が意志は今尙薄弱なり、シカも是によりて何となく強く感ぜらる、又予が行爲は今尙放逸なり、シカも是によりて何となく正さるゝが如く感ずるなり、  
予が生活より予の宗教を除き去らば我は尙一層無慚無愧の淺ましき生活を送りしならん、予の精神より其宗教的感化を除き去らば我は尙多くの罪を犯せしならん、  
予の宗教は全然歴史的次第相承の安心なり、予の宗教は全く守舊的なり、予の舊き衣服よりも、予の古き家屋よりも、予の舊き慣習よりも、我に於て最も古きものは予の宗教なり、夫れ破れたる衣服は之をつくるはざるべからず、壞れたる家屋は之を改修せざるべからず、すたれたる舊習は我獨り之を朴守するの要なし、其破れて用をなさざるものは之を溝渠に投せよ、用ゐるに便あり人に益するものは之を用ゆるに怠る勿れ、一切有爲の法は凡て最新主義に據り、老朽無用の具を捨て、最も新しきものを取り革新改變するを可とす、予の俗諦門は此の如く凡て最新主義なり、

然るに予の宗教は予が父の信仰と毫も異るとなきは何ぞや、而して毫も之を改むると能はざるは何ぞや、ゲーテ嘗て曰く人は一面に於て新奇を弄するの好奇心を有すると共に又一面には全く之と反對する頑固守舊の性を有すと、詩人の一語は却て明かに我胸中を道破せり、予は此一語を以て暫く、君の間に答へんと欲する也

予の知識は如何に進歩し、予の職業は如何に變遷し、又予の境遇は如何に推移するも、予は新らしき哲學を以て予の宗教に代ふると能はず、一切の學術、一切の經驗は到底我宗教を動かすの力を有せず、右聖嘗て曰く關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るが如く、佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得と、嗚呼誰か此の如き力を我に與ふるものぞ、所謂威武も屈すると能はず、富貴も淫すると能はず、貧賤も曲ぐるを能はざる底の大決心は不滅の信仰に歸着すべきに非ずや、  
宗教は我に於ては我内感なり其精神の最奥底に響く微妙の法音なり、其信仰は即惟摩の黙々底なり固より言説の及ぶ所に非ず、そが信仰の契機は其人の性質其人の境遇に應じて多少入る所を異にすべく、予は一概に同一模型の下に論ずること喜ばず、故に予は異主義異見の人と雖毫も憎む所なし、蓋し形式は未なり如來の眞實義は人々自ら得る所なかるべからずと確信すればなり  
宗教は一種の哲學なり、一種の主義なり、特殊の訓練なり、特殊の修養なり、特殊の經驗なり、否我に於ては殆んど凡て

の生命なり、我に宗教なくんば人生は全く無意義なり、我に信仰なくんば我は尙多く悲み、尙多く苦み、尙多く憂ふべかりしなり  
余は常に思へらく、人は過去に對しては、必ず追慕の情を起し、現在に對しては不満の念あり、未來に對しては必ず希望の心あるものなり、故に輾轉不遇失意の人にありては現在に常に不平不満の種ならざるはなし、  
此の如き人にして若し希望の光明なくんば遂に憂鬱の中に呻吟するに至らん、此時に於ける人生觀は最も悲愴沈痛の厭世觀たるべし、ショーペンハワー然り、バイロン然り、然れども此種の御面觀は何人も多少首肯する所なかるべからず  
十九世紀の獵末より二十世紀の劈頭にわたりて千萬人の胸を痛ましめたる悲愴の聲を聞け、  
嗚呼月島丸如何に彼等が最期の憐むべきかを追想せば何人も目前其悲鳴の聲を聞くが如く、同情の涙禁ずると能はざるべし、然れども予は同時に此の如く感ぜり、予は幸にして此の如き不幸より救はれたりと、君よ不滅の信仰を求めよ、予が最初の救濟者たる佛陀は此に明かに最後の慰問者たり「無明長夜の燈炬なり智眼くらしと悲むな、生死大海の船筏なり罪障おもしとなげかざれ」、嗚呼是れ實に千萬人の燈火たるべき慰問者の聲に非ずや、  
見よ、苦みの世界はやがて樂みの世界なり。闇黒の世界はやがて光明の世界なり、「意志としての世界」はやがて解脱の世界なり「寫象としての世界」はやがて本體の世界なり、有漏

の世界はやがて無漏の世界なり、虚偽の世界はやがて眞實の世界なり、矛盾の世界はやがて致一の世界なり、此の如くにして人生は再び意義あり、目的あり、希望あるものとして寫象せられ、一切の事業、一切の経験、一切の知識必しも徒勞ならず、凡ての社會的活動は、不滅信仰によりて其根底を固くすべし、人生の眞面目は此に至りて發揮するを得べく、友に對しては、友情あり、社會に對しては篤實なる行動あり、熱心と親切に一擧手一投足にあらはれ、其肝膽を披瀝し、其赤心を吐露し其滿腔の精神を傾注して、此に宗教的精神の片影を顯現すべし、「人生は眞摯なり、藝術は快活なり」とのシレルの語は此に於てか初めて其價値を認むることを得べし所謂眞面目なる生活とは何ぞや、如實修行相應、即是なり、如實修行相應とは何ぞや、戀師の淨土論註に曰く

云何爲不如實修行與名義不相應謂不知如來是實相身是爲物身又有三種不相應、一者信心不淳、若存若亡故、二者信心不無決定故三者信心不續、餘念間故、此三句展轉相成、以信心不淳故、無決定、無決定故念不續、亦可念不續故不得決定信、不得決定信故心不淳、與此相違名如實修行相應是故、論主建言我心、言誠に味ふべし、

嗚呼行くべき道は唯一なり、信すべき心は唯一心なり、不滅の信仰は、此唯一の道を取らしめ、一切の惡魔を降伏して我をして誤らしむるとなからん

カムレット將に死せんとするに當りて曰く、殘る所唯沈黙の

みど、是れ實に悲劇の最後なり又最後の人生觀なり嗚呼此歎々は、彼嗚々に勝ると幾何ぞや、君、今父の喪に際す願くば此最後の沈黙に就て少しく考察せよ、友の愛は我の愛なり、人の嘆きは又我の嘆きなり、君の悲みは又我の悲みなり、如上の見、取るに足らずと雖、聊か君の爲に告ぐ希くは靜座默考して自ら得る所あらんことを

(ついで)

新刊紹介

青年 急務檄言 (高橋秀臣著) 神田錦町一ノ十 文學同志會出版  
本書は著者が氣概ある青年の團結によりて、多年政界の累積したる汚穢を洗除し隨從の朋黨を排斥せんとて、所謂時世の急務に應じて此篇を公にしたるもの也、其言論多く過激に失したるの嫌ありと雖も、亦以て著者の熱血の迸る所を知るに足らむ(定價二十五錢)

日本監獄教誨史 (間野周門著) 京都東六條法藏館發行  
本書は明治年間監獄教誨の歴史を述べたるものにして、其沿革より説き起し一昨年の某監獄紛擾事件にて筆を收めぬ、全篇殆ど佛教者の關係したる事柄のみにして、外教者の事蹟を評論せざるは惜むべし

精神 第一號 東京府北豐島郡東鴨一八八五 精神界發行所  
吾人の切に誕生を祈りし精神界は、云ふ迄もなく精神主義を以て生れたる、本誌は誘らむが爲めに、罵らむが爲めに、世に出現したるにあらず云ふ、然り思想圓熟、論議著實洵に其言の如し、人或は本誌の本領たる精神主義の一篇をとりて其說辭新ならずといふものあり、奇を好む者にありては或は然らむ、然れども吾人は自家の立脚地を定め、自家の精神を充足する精神主義には飽迄贊同の意を表するに躊躇せざるものなり、

◎一金貳圓也 三河國碧海郡今村 清水良秀殿  
右御寄附を辱うし御高志の段茲に謹て謝意を表し候也  
二月 大日本佛教徒同盟會本部

廣 告

老川遺稿出版費領收廣告 (第三回)

金參圓	紀伊	久下	豊忠
金壹圓	東京	高島	大圓
金壹圓	安藝	天野	幸太郎
金壹圓	肥後	吉住	安太郎
金四拾錢	布哇	松本	豐隆
金五拾錢	東京	安藤	須彌
金五拾錢	越前	禿田	延千
金壹圓	東京	安藤	藤代
金貳圓五拾錢	東京	安藤	藤代
金五拾錢	東京	安藤	藤代
金五拾錢	東京	安藤	藤代
金壹圓五拾錢	東京	安藤	藤代
金八拾錢	東京	安藤	藤代
金壹圓	東京	安藤	藤代
金五拾錢	東京	安藤	藤代
金六拾錢	東京	安藤	藤代
金拾圓	東京	安藤	藤代
金壹圓五拾錢	東京	安藤	藤代

小計 三十三圓三拾錢  
金六拾八圓七十五錢也

文學士 清澤滿之師序  
文學士 近角常觀君著

信仰の餘瀝

全一冊 寸珍美本 紙數百頁餘

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵稅不要●郵券代用一割増

本書は著者か、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんことをす、

- 一、宗教的同朋。
- 二、活ける懺悔。
- 三、外、柔にして、内、剛なるべし。
- 四、聲をさくべし、光を見るべし。
- 五、我を捨ててと欲すれば捨つる能はず。
- 六、佛の人格。
- 七、地を固く踏めざれば常に歩を進めよ。
- 八、信界に於ける監獄。
- 九、詩的信仰は一種の懈慢界なり。
- 一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
- 一一、因果應報は宗教的自覺なり。
- 一二、相對世界の眞相。
- 一三、生きたが爲めに働かばならず、働かんが爲に生かばし。
- 一四、佛陀を近きに求めよ。
- 一五、信念の修養は實際問題に如くなし。

發行所

東京本郷森川町一番地 大日本佛教徒同盟會出版部

每月一回  
(十五日)發行

# 精神界

行發(號貳第)日五十月二

一部價十二錢一  
年分一圓二拾錢

明治三十一年十二月二十六日逕信省第三種郵便物認可  
明治三十四年二月十五日發行(毎月二回)日五十月二

政教時報第四十九號

大日本佛教徒同盟會發行

發行所 東京北豊島郡 精神界發行所 庶務部 東京本郷森川一の二四一 浩々洞

- ◎精神界●萬物一體●眼の問題、耳の問題、心の問題●常住の生命
- 嫉妬●「ユトピア」◎論說●信仰の第一義諦(齋藤唯信)●現時の
- 佛教青年(稻葉昌丸)●道德律の自由制定(大須賀秀道)◎解釋●三
- 誓の文(浩々洞)●臨滅に於ける釋尊の教誨(佐々木月樵)◎講話●
- 公德問題の基礎(清澤滿之)●自己を信ぜよ(上杉文秀)●行道進徳
- (本多辰次郎)◎感興●清韓雜詩(南條碩果)●故郷の雪(久保猪の吉)
- 田園雜興(非無)●雪達磨(杜葉)◎雜纂●我決心を固めたる教訓
- (井上圓了)●修道の難關(常盤大定)●教誨師の一日(XY)●菴羅樹
- 園に於ける入道者(多田鼎)◎社會●英皇ヴィクトリア●支那問題
- 公德●基督教徒の大舉傳道●將來の外國傳道●漢文及漢字●
- 伊藤圭介及福澤諭吉の兩翁◎報道●東京九より●名古屋九より
- (也佳)●加賀九より(銀杏)

可読物便郵種三第省信逕日六十二月二十年一十三治明

完發日一月三年四十三治明

# 政教時報

號十五第

◎規律なき國民◎遊廓傳道

論說

◎倫理の實踐は社會觀念を明にするより外なし

◎地方父兄に望む

社會

◎佛教徒懇話會◎坊守教會◎實行の時代◎宗教制度の調査

文學士

紀平正美  
鹽谷良吉

雜錄

◎西教事情

◎先德餘香

信界

◎忍辱の心

◎動機を一轉せしめよ(修養の一方)

(在伯林)

文學士 近角常觀  
文學士 本多辰次郎

文學士 清澤滿之

楠龍造